

# 現象学的アプローチにおけるインタビューの検討

## — ライフストーリー研究を参照にして —

Consideration of Interview in the Phenomenological Approach

— With Reference to Life Story Research —

岩崎 久志\*

Hisashi Iwasaki

現象学的アプローチとは、人間が体験する世界のありのままの認識、生きられた世界の意味の理解において有効な方法とされている。これは、そこで生じている出来事を客観的に捉えるのではなく、生活世界のうちにあるつつ、意味や体験を考えていこうとするものである。本小稿では、現象学的アプローチにおいてより有効なインタビュー方法を模索するために、社会学におけるライフストーリー研究の知見を参考にしながら考察を行った。

キーワード：現象学的アプローチ、生きづらさ、インタビュー、ライフストーリー、質的研究

### I. はじめに

昨年、「癌患者は働かなくてもいい」という国会議員の発言が物議をかもした。この発言をめぐる報道は、がんという病気を抱えている人は医療上の問題だけではなく、生活の質にかかわる困難のなかにあるということも浮き彫りにした。このことは、癌に限らずあらゆる病、いやもっと広い意味での「生きづらさ」を抱えている人にとって共通の状況といえるのではないだろうか。

しかしながら、「生きづらさ」を抱えているということでは共通点があっても、その中身は一人ひとりに固有の体験であり、一般化できない部分がある。たとえば、癌患者になることによって共通して体験する問題はあるといえる。だが、癌患者になることによってその人が抱える困難は生き方と密接にかかわっており、一律にまとめられるものではないだろう。

その人に固有の体験に焦点を当て、意味や価値を明らかにするのが質的研究における現象学的アプローチである。本小稿では、一人ひとりの「生きられた経験」を客観的な出来事として捉えるのではなく、当事者の生活世界に触れるかわりを通して意味や価値を明らかにしていく具体的な方法を模索していく。

そこで、現象学的アプローチの代表的な方法のひとつである、インタビューの手法を検討する。

そのために、ここでは社会学の分野における質的研究法としてのライフストーリー研究<sup>1)</sup>の知見を参考にしながら、研究者が対象者（語り手）の「生きられた経験」に触れるために、より有効なインタビュー実践のあり方を探っていきたい。

## II. 研究方法

現象学は、19世紀後半に、ドイツの哲学者フッサール（Edmund Husserl, 1859-1938）によって提唱された。フッサールは客観的な事実を明らかにしようとする自然科学的研究方法は、人間の思考や行動を研究するには不適當であると考えた。

現象学的な研究の姿勢とは、事実そのものに立ち返り、体験しているその人の側からその人の体験世界を理解しようとする態度やアプローチを志向することといえる。そのためには、まず意識の外部に客観的な世界が実在する、という確信を一旦保留し、そのうえで、それにもかかわらず世界の実在性が確信されるのはなぜかという、その確信成立の根拠を考えることになる。

現象学的アプローチとは、上記のような現象学の考えを基礎とするものであり、因果関係を明らかにしようとするものではなく、現象の本質を明らかにしていくことを探求する記述的研究の方法である。したがって、対象者の抱える問題を特定することよりも、まずはその人の生活のなかで起こっている現象の意味を捉えようとする意思が求められるのである。

ただしここでは、あくまでも哲学としての現象学の視点を基盤としており、共通了解の可能性に開かれた普遍性を見出そうとするところ（本質観取）に主眼を置いている。具体的な現象学的アプローチでは、当該対象者の「語り」をデータとして扱うことが多い。ただし、それはインタビューで語られたデータに限られるものではなく、記事、日記、物語、エピソードの記述、映像など、じつにさまざまなものが対象となる。

本研究では、そのなかから、インタビューによる聞き取りの実践に焦点化し、「生きられた経験」の意味を明らかにするために有効となるインタビューの方法について検討する。インタビューという形式を採用することにより、語り手と聞き手の相互作用による対話の構築が生まれ、記述された言説（ディスクール）には不可避となる読み手を想定した制限<sup>2)</sup>から解放された、「いま、ここ」での「語り」が実現されると考えられるからである。

ここでは主に、「語り」の聞き取りに関する方法論として、膨大な蓄積があると考えられる社会学分野における質的研究法としてのライフストーリー研究の知見を参考にしながら、先行研究のレビュー、そして筆者が行った聞き取りも含めた実践例の一部を検討することによって考察を展開していきたい。

また、ライフストーリー研究における聞き取りの方法に加えて、心理療法などの対人援助における面接方法とも比較検討しながら、現象学的なアプローチにおけるより有効なインタビューのあり方について、探索的に検討する。

### Ⅲ. 現象学的アプローチと社会調査のインタビューの特徴

#### 1. 現象学的アプローチとは

現象学的アプローチの主な目的のひとつが、クライアントの「生きられた経験」(lived experience)を明らかにすることであるとされる。「生きられた経験」とは、「意識の流れのなかで素朴に過ぎていく体験が、反省的な眼差しによって1つの統一体として捉えられる『意味のある体験』となること」といえる<sup>4)</sup>。近年、対人援助の領域において質的研究が再び注目されてきている状況にあって、現象学の方法原理は当事者の「生きられた経験」を明らかにするアプローチとしては、最も有効であり、「生きづらさ」の意味や本質に触れることのできるものであると考えられる。

現象学的方法を理解するためには、まずは現象学における方法論の核心部分として、フッサールの現象学の中核の「認識の可能性の原理」について、確認しておく必要がある。フッサールの現象学的方法をあらためて簡明に示すならば、「主観・客観の一致」の難問としての認識問題の謎を解明するために、2段階の方法原理があるとされる。それはまず一つ目として、「現象学的還元」を行うことである。そして二つ目の方法として、「現象学的還元」によって立ち戻った直接の意識体験について、「本質観取」を行うことになる<sup>5)</sup>。

一つ目の「現象学的還元」は、おのれの意識の外部に事物が実在していると信じる「自然的態度」を保留し、おのれの視点を意識の内部に引き戻す。事物が意識の外に存在していると信じるのが、どのようにすれば可能かを問う態度のことを「超越論的態度」といい、「自然的態度」の対概念とされる。したがって、「現象学的還元」とは、「自然的態度」から「超越論的態度」への態度変更をも意味する。

二つ目の方法の柱である「本質観取」には、現象としての意識体験から事柄の本質を取り出すという意味合いがある。「超越論的態度」への態度変更によって何ものかが存在するという確信(存在確信)が成立したとする。またその確信が、どのような条件で主観(意識)のうちで構成されるのか、共通の構造と条件を取り出すことを意味している。

つまり、「本質観取」とは「現象学的還元」の展開形とみなせる。反対に、「現象学的還元」は「対象存在の確信成立の条件」を観取するための必須の方法ともいえる。これらのように、現象学における「認識の可能性の原理」の2段階の方法原理を用いることにより、意識の外部に客観的な世界が実在する、という確信がいったん保留(エポケーとも呼ばれる)されるが、それにもかかわらず、世界の実在性を確信するのはなぜかという、その根拠を考えることになるのである。

上記の原理をふまえると、意識内部での「直接経験」において、外部世界が実在するという確信がどのように生まれるかという問いに答えるには、意識は以下の3つの段階的な過程を進むとされている。①まずはこの「直接経験」をインタビューの逐語録などとして記述することから始める。②そこで得られた記述を、想像によって自由に変更する。そして、③さまざまな現れ方の向こう側にある同一性を直観する。また想像によっていくら変更を試みても変更されないものは

本質であり、その本質を追求する考察を、「本質観取」（あるいは本質直観）といい、実存的意味の取り出しを意味するとともに、現象学的考察の目標とされるのである。

本小稿では、上記の3つの段階的な過程に入る前の段階にて、「直接経験」に聞き手としてどのようにかわり、語り手とともに「語り」を構築していくのかを明らかにすることが主眼となる。ちなみに、具体的な現象学的アプローチの実践例として、荒川千秋と神郡博による5段階に分けられた分析のプロセス<sup>6)</sup>を下記に示しておく。

- (1) インタビューの面接記録全体を完全な形で読み、全体の意味を理解する。
- (2) 研究課題に直接関係する段落や文を抜き出す。
- (3) 抜き出した部分から浮かび上がる意味を系統化する。
- (4) それぞれの意味を、一般用語かテーマごとに分類する。
- (5) (1)～(4)までの分析段階を研究課題に沿って本質的な概念構成で文章化する。

繰り返しになるが、本小稿で検討する中心のテーマは、上記における(1)の元となるインタビュー実施の方法論が中心となる。

## 2. 社会調査におけるインタビュー

社会学では、社会を観察する方法としての社会調査がある。インタビューは、そのなかのフィールドワークにおいて、「参与観察」と並ぶ方法の一つとして位置づけられる。そこでは、聞き手（調査者）が話し手（被調査者）に話を聞く。聞き手は研究目的にもとづいて、話し手の生活環境、ライフコース、性格・人物像、置かれている状況などを把握することから社会状況を説明していく。聞き取られた会話、映像や音声記録され、質的なデータが数量化されて機械的に分析される場合もある<sup>7)</sup>。

岸政彦は、ライフストーリーによる社会調査（生活史調査）を、以下のように定義している。「個人の語りに立脚した、総合的な社会調査である。それは、ある社会問題や歴史的事件の当事者や関係者によって語られた人生の経験の語りを、マクロな歴史と社会構造とに結びつける。語りを『歴史と構造』に結びつけ、そこに隠された『合理性』を理解し記述することが、生活史研究の目的である。」<sup>8)</sup>。ライフストーリーを聞き取ることが、まさに社会を観察する方法と結びついていることが理解できる記述であろう。

本小稿では、社会調査におけるインタビューのなかから、ライフストーリー研究のインタビューについて見ていく。ライフストーリー研究において、第一人者として挙げられるのが桜井厚である。その桜井による対話的構築主義のアプローチとしてのインタビューの方法が、現象学的アプローチにおけるインタビューと共有するところが多く、より有効なインタビューのあり方を検討するにあたって有益な示唆が知見を有していると考えられるからである。

桜井はライフストーリー研究のあり方について、「個人がこれまで歩んできた人生全体ないしは

その一部に焦点をあわせて全体的に、その人自身の経験から社会や文化の諸相や変動を読み解こうとするものである<sup>9)</sup>としている。そこでは、インタビューを語り手と聞き手の相互行為として捉えている。「聞き取る」という行為は、単に相手から必要とする情報を効率よく収集することではなく、相手を情報源として見る発想を退けている。桜井は一貫して、市井の人を対象とした調査を実施してきており、特に、被差別部落などの、いわゆるマイノリティと呼ばれる人々に聞き取りを行っている。

また桜井は、「聞き取り」の立場には「実証主義」「解釈的客観主義」「対話的構築主義」の3つがあるとしている。「実証主義」とは、人が生きてきた歴史は事実として客観的に把握できるという立場。「解釈的客観主義」とは、人々が語る各解釈を重ねていけば、共通部分が増えていき、ある客観的な歴史的事実に到達するという考え方である。そして「対話的構築主義」とは、桜井が最も重視する立場である。そこでは、語り手と聞き手は互いに向き合い、語り合うなかで、生活をめぐる物語が共同制作されていくのである<sup>10)</sup>。

ライフストーリー研究とは、それまでのライフヒストリー研究を批判的に継承し、発展させたものとされる。上記の3つ立場のうち、「実証主義」「解釈的客観主義」は従来のライフヒストリー研究に近く、ライフヒストリー研究では、既存の理論や概念的枠組みから設定する仮説を検証するための「何を語ったのか」に重点が置かれるのに対して、「対話的構築主義」では「いかに語ったのか」や「何のために語るのか」に重点を置き、語っている現在、およびそこから続く未来へと射程を広げたといえる<sup>11)</sup>。また、対話的構築主義のアプローチは、研究者も含めた人々のやり取りを通じて社会的現実が構成されると考える。その意味で、ライフストーリーは過去の出来事の単なる表象ではなく、語り手と聞き手との対話の産物なのである。

桜井によるライフストーリー研究の理論的基盤は、構築主義<sup>12)</sup>の考えおよび現象学的社会学を提唱したA・シュッツ (Alfred Schütz; 1899-1957) から影響を受けているという。それらの点から見ても、現象学的アプローチとライフストーリー研究にはもともと親和性があると考えられる。では、両者におけるインタビューの方法については、どのような共通点や違いがあるのだろうか。それは次節にて検討していくこととする。

ライフストーリー・インタビューにおける具体的な質問の仕方としては、たとえば冒頭から、「これまでの人生であなたが経験したことをお話いただけませんか」<sup>13)</sup>

「あなたの人生について語ってください」<sup>14)</sup>

といったように、いわゆるコミュニケーション技法における「開かれた質問」<sup>15)</sup>を使って始まることが一般的な進行のあり方としてよく見受けられる。

#### IV. 現象学的アプローチにおけるインタビューのあり方とは

先述のように、インタビューという形式を採用することにより、語り手と聞き手の相互作用に

よる対話の構築が生まれる可能性が高まる。そこで明らかとなった「生きられた経験」の意味は、まさに語り手と聞き手との対話の産物といえよう。その文脈では、現象学的アプローチとライフストーリー研究には親和性があり、少なからぬ点において共通するところもあると考えられる。

桜井も、ライフストーリー・インタビュー過程の進展にともなって、調査者（インタビュアー）に対する語り手のカテゴリー化が変化することに言及し、以下のように述べている。「インタビュアーがなにを聞きたいか、を理解し応答するだけではなく、語り手は、インタビュアーが何者かという存在そのものについてインタビュー過程をとおして解釈し、そうした解釈に媒介された（インタビュアーと語り手の相互行為からなる）語りの世界を、インタビュアーは理解・解釈するのである」としている。そのうえで、このような見方を「現象学的パースペクティブ」と呼んでいる<sup>16)</sup>。

では、実践として、どのようなインタビューのあり方が、対象者の「生きられた経験」の意味に接近していくことに適したものとなるのであろうか。それは換言すれば、桜井が「対話的構築主義」において重点を置いている「いかに語ったのか」や「何のために語るのか」になぞらえていうなら、「いかに聞くのか」あるいは「何のために聞くのか」という問題意識に重きを置いた問いとなる、ともいえるだろう。

## 1. インタビューというかわりにおける論点の整理

桜井のライフストーリーの研究方法では、インタビュー・データのトランスクリプト（逐語録）化に際して、定式化したルールが例示されている<sup>17)</sup>。このように、聞き手や研究者が共有できる規則を活用することで、語り手の「生きられた経験」の意味や価値に接近しやすくなるといえる。ただ、本研究の中心となるテーマは、先述のように、あくまでもインタビューによる聞き取りにおけるコミュニケーションのあり方に焦点化しているため、ここでは具体的な記述方法などについては触れない。

一方、現象学的アプローチにおいては、現象学のディシプリンに基づいた「認識の可能性の原理」があることはすでに述べたとおりである。しかしながら、現象学的アプローチを含む現象学的研究にはマニュアルや決まった手順がなく、研究テーマによって、それに適した方法を探求しなければならない<sup>18)</sup>。そのなかで、対人援助や医療的ケアの領域においては、現象学的な視点やかわりに関する先行研究が比較的多く、近年はさらに増えてきている傾向がうかがわれる。それでも、研究手法のアプローチや分析の方法については、村上靖彦が指摘するように、「師匠が見本を見せて、弟子が芸を盗むという形で伝承されることになる芸事」<sup>19)</sup>と言われるほど一般化されにくいものとされている。

そこで本小稿では、広い意味での（つまり、セラピーに限定しない）対人援助における現象学的アプローチにおける聞き取りのあり方と、ライフストーリー研究における対話的構築主義（桜

井)によるインタビューのあり方を比較検討することにより、下記の3点を重要な論点として抽出し、探索的に考察することを通して、現象学的アプローチにおいてより有効となるインタビュー方法を浮びあがらせることができらばと考える。

#### (1) ラポールをめぐる問題

対人援助の領域では、ほぼすべての分野において利用者（クライアントなど）と援助者との信頼関係、すなわちラポール（rapport）の構築が必要不可欠の要件とされている。一方、社会調査におけるインタビューにおいては、聞き手と話し手との信頼関係（ラポール）を築くことが望ましいが、一方で聞き手があらかじめ聞き出したいと考えているような内容を話し手が察知し、そのように答えてしまうような「モデルストーリー」についても用心しておかねばならないとされる<sup>20)</sup>。この点について、桜井も、「オーバーラポールといわれる過度な親密さや同一化も、不正確なデータをもたらしたり調査者の客観性を失わせたりする」と指摘している<sup>21)</sup>。

さらに、岸はラポールに関する議論について、「そもそも、いくら信頼関係があっても、いや信頼関係があればなおさら、どうしても言えないことがでてくるだろう」として、「調査というものは、原理的に、根本的に、暴力的なもの」だと述べている<sup>22)</sup>。ただ、それでも岸は同書の別の箇所では、ある特定のテーマで調査をしていくにあたり、「まず、取材や調査ということをわきに置いて、人として個人的な信頼関係を真面目に、真摯に築いていくしかないと思いますし、もしそういう関係が築けたなら、調査研究だけではなく、あなた自身の人間的な成長にもつながることでしょう」<sup>23)</sup>と述べている。

上記の岸による見解について、筆者は正反対の趣旨による矛盾した記述である、とは思わない。むしろ岸の見解を通して、語り手に限らず、他者と人間関係を取り結んでいくことの難しさや一筋縄ではいかない複雑さを再認識するものである。そこでの信頼関係とは、表層的なラポールという言葉や概念では言い表せない、それぞれ個別の対人関係において生じる、微妙な感情の増減に左右されるとしか言いようがないものではないだろうか。

#### (2) 「聴くこと」について

筆者はこれまで、主にカウンセラーとして対人援助の実践に携わってきた。そこでは、クライアントと呼ばれる利用者との関係において、何よりも傾聴の態度および姿勢を重視することを心掛けてきたつもりである。傾聴とは一般に、「相手の話すことに熱心に耳を傾けて、心で受けとめる」ということを意味する。では、ライフストーリー研究におけるインタビューの場合、聞き手はどのような態度・姿勢で臨むべきなのだろうか。

カウンセリングなどの援助的な面接においては、その場で事実を明らかにすることが目的ではない。たとえ、カウンセラーに対して事実が開示されなかったとしても、クライアントの問題解決

や苦悩の軽減、パーソナリティや行動変容に資することができれば目的の方向性に適っていると見える。そこでは、クライアント自身も問題の原因を意識できていないケースも多く、事実よりもクライアントにとっての真実やそれにまつわる感情を重視することもある。

しかし、社会調査の一環であるライフストーリー研究では、社会を観察する方法としてのインタビューである以上、ある程度の事柄が語られ、事実が明らかになることが必要となるのではないか。その意味において、対人援助とライフストーリー研究では、面接による聞き取りの「聞き方」あるいは「聴き方」には大きな違いがあると考えられるのではないだろうか。

しかし、両者をまったく方向性の異なる別の「きく」方法として位置づけることに、筆者はいささかの違和感を抱いている。少なくとも、語り手の「生きられた経験」の意味を明らかにする方法として、現象学的な視点が両者の共通基盤としてあるなら、聞き方にも共通する部分があると思わざるを得ないからである。そのことについて、以下で少し検討してみたい。

まず傾聴について。傾聴は英語でいうとアクティブ・リスニングという。つまり、積極的および能動的に聴くということだが、どのような意味が込められているのだろうか。つまり、言語による相手への働きかけという意味での積極性ではなく、相手の話すことにひたすら関心を向けて、じっくり耳を傾けて聴くという意味での「アクティブ」な姿勢だといえるのである<sup>24)</sup>。また、そこには、表情やうなずきといった、非言語的コミュニケーションを活用することも含まれている。

一方、ライフストーリー研究におけるインタビューにおいても、事実確認のために質問などの積極的な技法を立て続けに使っているというわけではないだろう。何よりも、そのような質問攻めのようなかわりをしてくる聞き手に対して、語り手は自分の体験を正直に話そうという気にはならないだろう。ライフストーリー・インタビューでは、先述のように「開かれた質問」の活用を心掛けるなど、傾聴の姿勢と共通するコミュニケーション技法も相応に活用していると見受けられる。

これらのことから、対人援助とライフストーリー研究における「聴くこと」は、ある程度共通する聞き手の姿勢・態度そして技法を用いながらも、それぞれの目的に向けたかかわりの方法を独自に活用しながら聞き取り（面接）を展開している、といえるだろう。

### (3) 相互作用の扱い～どこまで聞き手の思いを記すのか

研究の成果物、事例検討の提示資料など、語り手とのかかわりに関して公表する内容についても、対人援助とライフストーリー研究では記述の範囲が異なっている。通常、カウンセリング面接等の事例研究では、その逐語録には、補足説明や注釈的なコメントを除いて、面接場面で実際に交わされた対話のみが記録される。片や、ライフストーリー研究（対話的構築主義）においては、聞き手の実際に発した言葉だけではなく、語り手の発言を聞いて聞き手（インタビュアー）自身が抱いた感想や感情の動きといったものも含めて記述される。

ライフストーリー研究のインタビューでは、次項に述べる質的研究におけるエビデンスの問題とも関連しているからと考えられるが、何よりもライフストーリーを聞き取るという営みが語り手と聞き手の相互作用によって成り立ち、聞き取りの質的データそのものが両者による共同制作として捉えられているからである。

現象学的アプローチという手法が、「生きられた経験」の意味に接近していくために有効となる、あくまでも「研究方法」のひとつと位置づけるなら、研究内容において提示された記述に対してはその明証性や説得力が求められるのが当然である。その意味では、対人援助における面接の逐語録を研究者が主にメタレベルの視点から分析する、いわゆる事例研究のスタイルにとどまるのではなく、研究の質的データであるトランスクリプト自体が、読む者に主張を訴えかけるといった特徴を有するくらいであってもいいのではないかと思われるが、いかがであろうか。

ここでは、筆者自身が行ったカウンセリング面接から、面接場面で実際に交わされた対話のみを記録した逐語録と、純然としたライフストーリー研究ではないが、ドキュメントとして書籍化されたインタビューの記述から、それぞれ一部を抜粋して以下に提示する。特に質問をしている場面に着目して、聞き手のかかわりの違いについて見てみる。

まずは筆者によるケースでのやり取りからである<sup>25)</sup>。本ケースでは、クライアントのA君は高校を2学年が終了する時点で中退し、その後通信制高校に入学した。ここでは後年に、その通信制高校での生活について尋ねた部分のやり取りを提示している。

#### 《カウンセリング面接の例》

筆者（以下C o.）：K高校の1年間はどうだったの？

A君：えぐい。前の高校2年間より長かった。面白くない。

C o.：どんな感じなの？

A君：高校だけど雑居ビルの1・2階にあった。普通科と通信があって普通科に行きたいと思ったけど、現役で卒業できないとわかって、通信に行くことにした。通信に行ったら、いろんな学生さんがいた。けばい人が多くて委縮したが、彼らも心に傷を負ったり、不登校気味になったり、いじめを受けて通えない子たちのようだった。

C o.：クラスとかはあったの？

A君：クラスはあったが、個々が傷を抱えているからほとんど交流はなかった。仲良くしている子たちがちょこちょこいる程度。普通に授業受けて終わったらさよならという感じだった。まともそうに見える子でもリストカットをしていたり。その子は1つ下だったけどリストカットがやめられないという子がいた。はじめは慕ってくれていたが、ある日を境に遠ざかっていった。たぶん僕がいないことを言ってしまったのかも知れない。女の子で何も考えず発した言葉が彼女を傷つけてしまったのかな。そこが心

残り。その中でもBという子がいて、C市に住んでるのかな？その子は卒業するぐらいまで仲良かった。僕も1人だったけど入学して半年ぐらいの頃、途中で入ってきたのかな？その子と仲良くなった。その子の話を聞いていたら、いじめを受けたと言っていた。普通科から移ってきた。その子とも長い付き合いにはならなかった。K高校時代だけで終わった。普通だったら月曜から金曜まで授業があって、土日に遊ぶスタイルだけど、K高校は反対で月曜から金曜まで休みで土曜にスクーリングがあって、というスタイルなので、前に居た高校の子たちと遊ぶほうにもサイクルが合わない。こちらでもスクーリングが終わったら母親が迎えに来て帰るから。

上記の逐語録では、カウンセラー（C o.）からの質問は基本的に簡潔な問いかけで、開かれた質問が投げかけられている。聞き手自身の心情などは開示されていない。

次に、書籍化されたインタビューの記述から3つの断片的な部分を抜粋して提示する。出典は、映画監督で作家の森達也氏が第一線の科学者たちに「いのち」の根源を問いかけた、インタビュー集<sup>26)</sup>からである。太字部分は筆者自身が施したもので、森氏が自身の思いを付加している記述である。

#### 《科学者へのインタビューの例》

森氏：「…人類はこれだけ進化したのに、なぜ未だにテロや戦争などで殺し合うことをやめられないのでしょうか」この質問は少しだけ気恥ずかしい。自分が小学生になったような気分になる。でも訊かないわけにはいかない<sup>27)</sup>。

森氏：「……えーと、この場合の『本人』は細胞ですね」

思わず確認した理由は、団が（当然のように）駆使する細胞の擬人化に、どうしても一抹の気後れを払拭できないからだ。つまりその意味では、僕も旧態依然の科学の文法から、やはり逃れられずにいる<sup>28)</sup>。

森氏：でもいつまでもこの話ばかりをしているわけにもゆかない。僕は腕の時計にちらりと視線を送る。長沼に訊きたいことは他にもたくさんある。その一つは宇宙の生きものについてだ。

「先ほどの長沼さんが言った木星の衛星はエウパロですよ」<sup>29)</sup>。

森氏による質問の会話文に付加および先んじている記述は、まるでインタビュアーの「手の内」を明かしているかのようにあからさまな感じを受ける。また、「きく」という言葉を「訊く」とい

う字で表記しているのも特徴的である。ちなみに「訊く」とは、問い質すというニュアンスの強い聞き方の意味合いが強い。実際の会話における質問文に加えて、聞き手の思いを記すことによって、読む側の印象がずいぶんと異なってくるのが見て取れるのではないだろうか。

## 2. エビデンスの担保について

現象学的アプローチによって、「生きられた経験」の意味に接近していくことは、研究方法としては質的研究の一方法として位置づけられる。また、社会調査の一環であるライフストーリー・インタビューも、質的研究のひとつである。両者とも、研究結果については、当然のことだが質的研究としての科学性が求められる。では、聞き取りによって得られた質的データを分析することにおいて、研究者はどのようにして結果に関するエビデンスを担保できるものであろうか。

一般に、量的研究は客観的で、再現可能であり、科学的根拠（エビデンス）の信頼性が高いものとされている。一方、質的研究に対しては、これまでその科学性や一般化可能性が乏しいのではないかとの見方がなされてきた。しかしながら、近年、質的研究は対人援助の分野にとってはけっして軽視することのできない重要なパラダイムとして認知されている。例えば、看護などの分野において質的研究を方法論として採用するテーマやそれに取り組む研究者も徐々に増えている<sup>30)</sup>。

ここでは、量的研究との比較による質的研究の科学性という議論ではなく、質的研究、なかでもインタビューにより得られた質的データとエビデンスの関係について考察する。それは、換言すれば、現象学的アプローチによる研究実践においてエビデンスをいかにして明示するか、という問題といえる。

西研は、人を支援する実践を支える人間科学は、自然科学と同様なエビデンスに基づくべきではないとして、「人間の『体験』の世界を理解しようとする人間科学においては、自然科学とは別種のエビデンスが考えられてしかるべき<sup>31)</sup>と指摘している。では、人間科学におけるエビデンスとは、どのようなものを意味するのだろうか。西によれば、人間科学の質的研究においては、インタビューやエピソードのような「語りの記録である『テキスト』が、語り手の心の世界に生じた『事実』を表す証拠、つまりエビデンスだとみなされている」としている<sup>32)</sup>。

具体的には、どういうことなのか。筆者には正直、いまひとつわかりにくいのではないかという気がしている。この疑問に対して、山竹伸二の下記の見解は、現象学的アプローチによる研究実践において、インタビューにより得られた質的データがエビデンスたりうる条件をある程度示しているのではないかと思われる。

山竹は、「たとえ語られたテキストが客観的な現実ではないとしても、語った当事者がテキストを読んで納得したのであれば、それが彼の了解している意味の世界、主観的世界であることに変わりありません。したがって、こうした当事者の納得、了解こそが目的だと考えればよいのです」

と述べている<sup>33)</sup>。

岩崎は山竹の見解を踏まえて、さらに次のステップとして、個別の事例だけではなく、他の事例にも共通し、応用可能となる一般的な構造を導き出すことはどのようにして可能となるのかについて検討している。そこでは、研究者・実践者が、読み手の共通理解を得るために、自身の感じ方とともに、それに至った「確信の根拠」を示すことだとしている。これは、すでに述べたフッサール現象学の方法原理である「現象学的還元」および「本質観取」の過程に含まれていることである。「確信の根拠」を明言化することによって、語りの当事者や研究者だけではなく、他の人々にも「なるほど」と納得できる、「共通理解」をもたらすことが可能となるということである<sup>34)</sup>。

語り手および読み手の共通理解を得ることができる「確信根拠」を提示するための聞き取りを実施するためには、どのようなインタビューのあり方が必要十分条件となるのであろうか。

## V. おわりに～現時点での結論

ここまで述べてきたことを踏まえて、筆者自身が最も強く感じるのは、「聞き取り」という行為あるいはかかわりの幅広さである。そのため、現象学的アプローチにおける有効なインタビューのあり方を限定して明確に提示することは、一筋縄ではいかないと言わざるを得ない。ここで言い訳めいたことを述べさせていただくなら、その難しさこそが質的研究の特徴というか、ある種、宿命のとも言える、明確化を拒否する性質であるということかもしれない。

「いかに聞くのか」ということに関連して、広木克行は、具体的な手法としてではないが、インタビューにおける「生きられた経験」に接近するためのヒントとなるようなコメントを述べている。それは、不登校の状態の子どもとのかかわりについてで、少し長いが以下に引用してみる<sup>35)</sup>。

そうした子どもたちとの出会いに際して私が話を聴くときの構えを振り返ってみると、いわゆるライフストーリーの研究で話を聴くときのインタビューのように、個人が語る内容の事実性に関心を集中して聞く聞き方とはやはり違います。同時にライフストーリーを聴いていくときのいわば相互的な対話とでも言いましょうか、個人が語るライフストーリーに対話的にかかわりながら傾聴していくという、語られた中身の事実性よりも相互の主観的世界を大事にしながら語られたストーリー自体に価値を置く、そういう聞き方も少し違っていたと思います。私は、クライマンが『病の語り』<sup>36)</sup>で言うような、「病を抱えた者の語り」を、語られたことや語られぬことの内容が意味することに関心をもちながらひたすら聴くという姿勢を大切にしようと、自分なりに考え、工夫してきたように思います。

広木の、まさに「語り」を読んで、筆者は、「語られたことや語られぬことの内容が意味することに関心をもちながらひたすら聴くという姿勢」という表現に強い共感を抱く。そこには、理論

的に説明すると綻びが出てしまうかもしれないが、聞き取りにおける「かかわりの幅広さ」を垣間見ることのできる、村上のいう「伝承される芸事」のような極意が含意されていると思われるからある。

また、本研究を通して臆気ながら見えてきたこともいくつかある。ここでは、そのことを記し、現時点での結論として述べることで、本小稿を締めくくるとしたい。前節にてインタビューのかかわりにおける論点として3つを抽出した。これらはいずれも相互かつ密接につながっているといえる。したがって重複するところもあるが、各論点に沿って以下に述べることにする。

- (1) ラポールをめぐる問題：社会調査の視点から、オーバーラポールの問題が指摘されてはいるが、やはり基本的な対人関係を成り立たせるための信頼関係の構築は不可欠と考える。過度な親密さや暴力的な作用が生じるということは、じつはまだ本来の意味での信頼関係が築かれていないということである。相手を信頼しているからこそ、素直に拒否し、時には辛辣なことも言えるのではないだろうか。安心感の持てない人間関係では、拒むことさえできない場合がある。
- (2) 「聴くこと」について：この点については、現象学的アプローチにおいても、基本的には傾聴の姿勢・態度に基づいて「聞き取り」がなされるべきであろう。「それぞれの目的に向けたかかわりの方法を独自に活用しながら」とした意味は、インタビューの機会や時間がどれだけ与えられているかによって左右されるところが大きいことだ。カウンセリングの枠組みでは、継続して何度も面接する機会を得ることが一般的である。一方、せいぜい数回の聞き取りの機会が与えられる社会調査では、「待つ」ことの意義や効用も当然異なる。たとえ、その場で問うことをしなくても、時の流れや面接の展開とともに、話し手が自ら語り始めることもあるのである。
- (3) 相互作用の扱い：どこまで聞き手の思いを記述するか、という問題は実践者によって意見の分かれることではないだろうか。聞き手の発言を省略する記述に対しては、エビデンスにかかわる明証性という点でも、筆者自身は否定的な意見を持っている。「生きられた経験」の意味を明らかにするためには、相互作用としての「語り」が十分明確に示される必要があると考えるからである。また、聞き手の心の動きをある程度明示することも理解の手掛かりとなる。それは特に、現象学的な視点から聞き手にとっての確信成立の根拠を示すという意味で重要となる。ただ、森氏のドキュメントから引用した聞き手の思いなどについては、話し手がそれを目にするとき、どのような思いを抱くことになるのか、筆者にはいささか気になるところではある。

以上、ライフストーリー研究を参考にしながら、現象学的アプローチにおけるインタビューのあり方について検討してきた。有効な方法論をなかなか定型化できない限り、いやそうであるならなおのこと、本小稿で示してきたような「幅」の範囲において、地道に実践を積み重ねて「聞

き取り」の事例を示していくことが一層大切となるものと思われる。ここでの考察が、そのための一助になれば幸いである。

#### 引用文献、注

- 1) 社会学の教科書や入門書等では、ライフストーリーを「生活史」と日本語で表記しているものもある。また、その他にも、ライフヒストリー、オーラルヒストリー、ナラティブなどと、いろいろな呼ばれ方をしている。
- 2) たとえば、岩崎は社会福祉実習に参加した学生による個人報告の記述を分析したうえで、「これは授業の一環として、しかも公開を前提に書かれたものであり、学生の内発的な思いが正直に表現されるかどうかという点では、十分な期待は持ち難い」として、「やはり非構造化インタビューなどにより、しかもクローズドな状況によるデータ取得でなければ掬い取れない個人の考えや思いがある」と述べている<sup>3)</sup>。
- 3) 岩崎久志：「社会福祉実習の意義と効用に関する一考察 - 現象学の視点から - 」、『流通科学大学 高等教育推進センター紀要』第2号（2017）32-33.
- 4) 岩崎久志：『「生きられた経験」を明らかにする現象学的考察の検討』、『流通科学大学論集 - 人間・社会・自然編 - 』29, No1（2016）14-16.
- 5) 現象学の「認識の可能性の原理」とその2段階の方法については、同上, 12-13. および 19-20. を参照のこと。
- 6) 荒川千秋・神郡博：「看護相談場面のカウンセリング効果に関する研究」、『富山医科薬科大学看護学雑誌』第2号，（1999）134.
- 7) 栗田真樹：「社会を観察する方法」, 篠原清夫・栗田真樹編著『大学生のための社会学入門』（晃洋書房, 2016）19.
- 8) 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美：『質的社会調査の方法 - 他者の合理性の理解社会学』（有斐閣, 2016）156.
- 9) 桜井厚：『インタビューの社会学 - ライフストーリーの聞き方』（せりか書房, 2002）14.
- 10) 好井裕明：『「あたりまえ」を疑う社会学 質的調査のセンス』（光文社, 2006）129-133.
- 11) 石川良子・西倉実季：「ライフストーリー研究に何ができるか」, 桜井厚・石川良子編著『ライフストーリー研究に何ができるか 対話的構築主義の批判的継承』（新曜社, 2015）1-2.
- 12) 大まかには、社会的現実、客観的に存在するのではなく、研究者も含めた人々のやり取りを通して構成されるという考えのことをいう。
- 13) 桜井厚：前掲書（9）, 13.
- 14) 同上, 63.
- 15) 質問された人が自由に語るようができるように促す質問技法。「はい」「いいえ」で答えられる閉ざされた質問よりもはるかに自由度が高く、多くの情報を得ることが可能であり、面接の流れが深まるとされる。
- 16) 桜井厚：『ライフストーリー論』（弘文堂, 2012）49.
- 17) 桜井厚・小林多寿子編著：『ライフストーリー - インタビュー - 質的研究入門』（せりか書房, 2005）135-138.
- 18) 岩崎久志：「対人援助の実践についての現象学的考察」, 『流通科学大学論集 - 人間・社会・自然編 - 』28, No2（2016）23.
- 19) 村上靖彦：「応用現象学を学ぶ人のために - ごっこ遊びと自閉症児の並べ遊びを例に」, 戸和田和久・出口康夫編：『応用哲学を学ぶ人のために』（世界思想社, 2011）148.
- 20) 栗田真樹：前掲書（7）, 19.

- 21) 桜井厚：前掲書（9）,64.
- 22) 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美：前掲書（8）,164.
- 23) 同上,201.
- 24) 岩崎久志：『看護・チーム支援に活かすカウンセリング - 対人援助、多職種連携に必要なコミュニケーション技術 - 』（晃洋書房,2014）16.
- 25) 本事例を掲載するにあたり、守秘義務の観点から個人が特定されないように配慮を施している。また、掲載に関してはクライアントより承諾を得ていることを断っておく。
- 26) 森達也：『私たちはどこから来て、どこへ行くのか - 科学に『いのち』の根源を問う』（筑摩書房,2015）
- 27) 同上,115.
- 28) 同上,142-143.
- 29) 同上,191.
- 30) 佐保美奈子：「現象学の視点を臨床教育学に取り入れること」、『臨床教育学研究』第5巻（2017）199-202.、また、対人援助の分野における質的研究の科学性やその研究実践例については、岩崎が前掲書（18）,16-19.にて検討している。
- 31) 西研：「プロローグ」、小林隆児・西研編著：『人間科学におけるエビデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』（新曜社,2015）i.
- 32) 西研：「人間科学と本質観取」、小林隆児・西研編著：『人間科学におけるエビデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』（新曜社,2015）123.
- 33) 山竹伸二：「質的研究における現象学の可能性」、小林隆児・西研編著：『人間科学におけるエビデンスとは何か 現象学と実践をつなぐ』（新曜社,2015）73-74.
- 34) 岩崎久志：前掲書（4）,23.
- 35) 広木克行・田中昌弥・田中孝彦：「座談会 子ども・若者理解研究の課題を探る」、『臨床教育学研究』第5巻（2017）7.
- 36) アーサー・クラインマン（江口重幸・五木田紳・上野豪志 訳）：『病の語り - 慢性の病をめぐる臨床人類学』（誠信書房,1996）.本書は、慢性の病をかかえた患者やその家族による肉声の語りを中心に構成されている。そして、病むことの意味が今日どのような変容をとげつつあり、今日の医療やケアはいかにあるべきかを明らかにしようとしている。